

父なる神様の愛に出会って



大平郁子と申します。年齢は46歳ですが、イエス様にであって洗礼を受けたのは2年半前の新米です。今聖書学院の2年生です。こんな歳になっておかしいと思われるかもしれませんが、私はいつも親の愛情を求めていました。そのままの私を受け止めてくれる存在を求めていました。そしてクリスチャンになって、初めてイエス様の赦しを通して、安心して自分自身を差し出して、受け止めてくれる存在を得ました。イエス様、天の父親です。

中高生の頃、私は親を憎んでいました。そしてそんな自分自身がとても嫌いでした。こんな人間死んでしまえばいいといつも思っていました。必死でいい人間でいようとしていましたが、心の中はいつも荒れていました。母は元クリスチャンでしたが、私が高校生のころ、私を心配するあまり夜中の2時に突然私を起こして「あんた、そんな顔じゃどうせ結婚できへん。教師になり。教師やったら食べていける。あんた、教師になりなさい。」というような大変人間的な愛情にあふれる人でした。残念なことにその大きな愛情は当時の私には通じませんでした。父は後で分かったことですがアスペルガー症候群とあって、自分の心や人の心がわかりにくいという脳の障害の疑いがあり、子どもの頃の私にとっては全く無視されるか、助けを求めても「お前はなんでそんなことで泣いとるんや」とばかにされた思いしかありませんでした。

何かに頼りたいと思っても私には信じることはできませんでした。親も神様も私にとってはいつも何かを要求してくる、気分しだいでさっと愛情をひっこめ、罰を与える恐ろしい存在でした。歴史好きの兄の影響で「仏壇は江戸幕府のただの政策や。」というのをいやと言うほど聞いていて、仏教も信じられませんでした。その兄が不安神経症になり、転々とあやしい新興宗教をめぐるめぐるのを見て、偽物にはだまされるもんか、と心に決めていました。唯一私が逃げ込める世界は小説の世界でした。目標はいつしか早く大人になって強くなることになりました。

でも、強くなったと思う時期は長くは続きませんでした。2008年3月30日、イエス様に出会います。44歳になっていました。仕事と癌の母の看病で、おそろしくしんどくて立っているのもつらい状況がつづき、母は亡くなり、私は自分がうつ状態だと思って病院へ行っても相手にしてもらえず、料理もできなくなった状態では結婚の望みもない、母の言う通りになってしまったと絶望しかかっていた。その後母が亡くなってからますます調子を壊した父と兄から毎日のように「お前はわしと一緒にいるんが、そんなにいやなんか。そんなにわしのことが嫌いなんか。今から死ぬ」という電話の対応に追われ、私の不幸は全部この父と兄のせいだ、この家族の問題から逃れられたら私は自由になると思いました。そして「もう行方不明になろう。」と決心していました。

そんなとき、イエス様に出会いました。イギリスの大学で働いている大学時代の同級生が一時帰国したときでした。私は友達に自分のみじめな状況がいえませんでした。自分のことに関してはいい話しかできませんでした。そして喧嘩がはじまり、私はその夜眠れなくなりそれから3日

間一睡もできなくなりました。

人は亡くなる前に自分の人生を走馬灯のように見るとよく言いますが、まさにそんな風に、自分がそれまで心の中に溜め込んでいた「悪いことしたな」と思っていたことが次々と目の前に浮かんできました。小学校のとき、母のことを「死ね死ね死ね」とノートに何百回と書いていたことや、「なんで私なんか産んだのよ！」と一番ひどい言葉をかけたことも、父の仏壇おがみに「やめてよ！気持ち悪い！」と怒鳴り散らしていたこと。強欲で、みえっぱりで、人のせいばかりにして自分にも他人にも完璧をもとめてばかりいて、頑張っている人になろうとしても、実は本当の自分を受け入れてもらえない憎しみでいっぱいの自分の姿でした。狂って精神病院へ行くか、このまま死んでしまうかどちらかだと思いました。もう薬に頼るしかないと言いに電話をかけ、日曜でも空いている精神科を紹介してもらおうと思いました。

そこで紹介されたのが牧師様でした。その10年前からクリスチャンになっていた兄から電話がかかってきて「今、教会にいる。牧師に代わる」と息せき切って兄は言いました。「あんたイエスキリストを信じるか？」と牧師様は問きました。私は「もちろん信じます」とすぐに返事をしました。教会には通っていませんでしたが、聖書は中学2年から読んでいて、この電話の6年前から聖書の言うところの天地の創造主を信じていました。

「私に続けて言いなさい」と兄の教会の牧師様は言いました。「天のお父様、私の罪をお許してください。知って犯した罪、知らずに犯した罪、すべての罪をお許してください。」「イエス様、私の罪を代わりに背負ってくださってありがとうございます。」涙があふれてとまりませんでした。そしてその日からイエス様は本当にいたんだと思って深く眠りました。それから毎日牧師様に罪の告白をして赦しをいただきました。その後不思議な導きで、兄の教会ではなく6年間頼っていたゴスペルのCDにメッセージを書かれていたピヒカラ先生の教会にそうと知らずに導かれました。

今、問題がなくなったわけではありません。今でも父と兄は調子を崩しては私に電話してきます。でも、家族の問題から逃れたら私は自由になるというのは間違いでした。問題は私自身の中にありました。それはいい人間でいようとして心の中に閉じ込めてきた本当の自分自身でした。イエス様がそのすべて担ってくれました。そして私は自由になりました。

要求ばかりする、罰を与えるだけの神様の恐ろしいイメージは全くなくなりました。今あるのは仮に何もできない自分でも、その存在を大事にして下さっているイエス様の愛です。イエス様を送ってくれることで、私たち子どもの罪を肩代わりしてでも何とかしてやろうとする天の父の愛情です。その後も毎日その愛情をもらっている喜びです。間違ったときにはちゃんとしかってくれ、必要な良いものを誰よりもよく知っていて与えてくれる父に、安心して身を任せることのできる喜びです。

「ああ、私は存在していていいんだ」という絶対的な安心感。それがあって、最近、長年悩んでいた親を愛せないという悩みから解放されました。親からどんなに頓珍漢なことを言われても、そこに愛情さえ感じるようになりました。自分の存在を赦せないという最大の悩みからも解決されました。

私の場合、イエス様に出会うまで44年かかりましたが、それはそれでよかったと思います。なぜなら大きな悩みのおかげで大きな安心をもらったからです。今もし悩んでいる方がいたら安心してください。悩みが大きければ大きいほど、大きな喜びをもらえます。ぜひこのすばらしい神様に出会ってほしいと思います。ありがとうございました。

(HAT 神戸キリスト教会会員、2010年12月4日の証し)